

植民され続けた経験を想像する力

—台湾先住民族を囲む植民国家資本の機制との関連で読む

『余生』と『あまりに野蛮な』 —

中村 平*

Highland Taiwanese indigenous peoples have been placed under the assimilation policy both by Japanese colonial state capital (a conspiracy between state and capital) and Republic of China's, while the liberation movement from those fetters has been continued. This paper examines the style of decolonial movement, considering two novels written by Wu He and Tsushima Yuko, which have both abundant theme and description of decolonial movement. While paying attention to the description in those novels that approaches the colonized experiences of Taiwanese indigenous peoples from the writers' stand point and own experiences (especially accompanying pain), this paper gives language toward a power which goes beyond the division of concept and subjectification of "Japanese/ Taiwanese/ Taiwanese indigenous people" and "Female/ Male," that have been prescribed by state capital and nationalism. The colonized violent experiences of Taiwanese indigenous peoples will be shared (*bun-yuu*) to surround persons in the new intimate relationship by the style of not being prescribed by state, and also in the voyage-in travel accompanying healing. Furthermore, the decolonial movement are also done in the space where those writings of history, memories and experiences are read.

Key words : Decolonization, Taiwanese Indigenous Peoples, Nakamura Masaru, Wu He, Tsushima Yuko

はじめに：脱植民化

韓国や日本の歴史・思想学界や民間において2010年は、韓国併合百年の特集やシンポジウムが多く組まれ、日台関係においては1930年の「霧社決起」、あるいは「霧社事件」の80周年に当たる。2001年から2008年
ちん すいへん
にわたる陳水扁民進党政権中には、台湾先住民族自身による歴史の探究

とアイデンティティの追究が進められ、また民間においては民族議会設置による自治推進の運動が、民族間で温度差があるとは言え、行なわれてきたり。2008年6月にはアイヌ民族を先住民族と認める国会決議が日本で行なわれ、2009年には沖縄で米軍普天間基地の移設をめぐる日本政府への批判が高まった。こうした東アジアの状況を一言で表すなら、帝国日本とその遺産の歴史を、マイノリティ被植民者または先住民族の立場から、脱植民化という方向性において批判的に振り返る事態である。台湾先住民族においては、帝国日本の統治を離れた、第二次大戦後の中華民国＝国民党統治の性格と所業を明らかにすることも、同様に大きな課題である。

脱植民化は英語でdecolonization、中国語で「去殖民」と表記される。日本語では「脱植民地化」と表記される場合も多いが、本稿では、脱植民化が被植民者だけの問題ではなく、むしろマジョリティである植民側の問題であるということを強く喚起するために「脱植民化」を用いる（中村平 2009参照）。丸川哲史（2000）が言うように、この語は「脱帝国化」とほぼ同義である。中村平（2009）は、タイヤルを中心に台湾先住民族知識人の脱植民化の主張を整理し、二つに焦点化した。一つは帝国日本の土地の国有化つまり、土地を収奪された歴史と現状の認識であり、それに根源を發する経済的困窮の問題である。もう一つの側面は精神や魂の脱植民化とも言うべきもので、台湾先住民族が支配者日本人・中国人の価値観どおりに行為するよう主体化されてきた（主体化してきた）という点である（中村 2009；周 2009、深尾 2009も参照2））。

* 漢陽大学校 國際文化大学 日本言語文化学科 助教授

- 1) 本稿は台湾先住民族の自称である「台湾原住民族」を、日本語「原住民」の語感、ならびに筆者を含めた日本社会における台湾先住民族運動史の認識の未成熟を鑑み、「台湾先住民族」と訳している。本稿において「民族」の語を使用する場合、当座は国民国家体制の中での権利獲得を目標とする先住民族運動史においての限りであり、中村勝（2009）が述べるように、国家と一体化する民族概念が根源的な脱植民化において足かせとなる可能性を念頭においた限りである。
- 2) 魂の植民地化について、深尾は以下のように説明している。強力あるいは暴力的他者との相互作用の結果、自分の内在的感覚を否定し、他者から押し付けられた視点で自分を見つめ、その結果、その視線を内部に取り込んで自分自身を監督し、行動を律するようになることを言う。他人に何かを押し付けられたり、強制されたりするだけではなく、相手のパースペクティブを自分自身の中に取り込んで、自分本来の情動や感情に逆らい

以上のような脱植民化への「ハード」と「ソフト」の各側面の課題は、フェミニズムの観点から重ねて分析の対象とする必要がある。ドメスティック・バイオレンス（家庭内暴力）にさらされてきた台湾先住民族女性からは、すぐ上に述べた「支配者」には「男性」がつけ加えられ、「被植民」状況は民族間にも、性別間にもある。先住民族女性にとって脱植民化は、民族間の自治のみで達成されるわけではなく、男性の暴力に脅かされずに真に民主的な関係を作っていくことが課題となる（中村平 2009；^{リカラッ}利格拉楽 1998も参照）。

^{ば えいきゅう}

さらに2008年5月からの馬英九国民党政権のもとでは、2010年6月に締結された「中台経済協力枠組み協定」(ECFA : Economic Cooperation Framework Agreement) に見られるように、反対運動を抑えつつ、経済面から中国と台湾の統合的地ならしが進められている。こうした潮流の中で「台湾」先住民族がいかなる根源的な自治を模索していくのか、コンセンサスが求められていると言えよう。

以上のような台湾先住民族をとりまく脱植民化の困難な、重層的な課題を、本稿は特に日本との関係と、記述者の立場と経験との関連から探究する。今回取りあげる学術書と小説二つのテキストは、中村勝（1944年生）の『捕囚：植民国家台湾における主体的自然と社会的権力に関する歴史人類学』（2009年）、そして舞鶴（1951年生）の『余生』（1999年）、津島佑子（1947年生）の『あまりに野蛮な』（2008年）である。まず『捕囚』から植民化の機制を「植民国家資本」としてあることを確認し、次に、植民地状況において暴力を含め起こってしまったことへの対応が、自らの立場と経験に留意しつつ記述されている二つの小説を見たい。これらのテキストは、娯楽としての小説の側面と同時に、台湾先住民族とかかわりを持つマジョリティ（日本人・男性）自身の脱植民化の記述の運動と言える側面を明らかに持つものであり、その運動のスタイルと成果を三つのテキストから抽出し洗練させる。本稿は、植民国家

ながら、自らを制御し、行動を形成し、他者への働きかけを行うことを指す。ある環境の中での学習や模倣行為と、魂の植民地化の相違は、本来の自身の感覚へのフィードバックの有無にある。

資本の機制において台湾先住民族が植民され続けた経験を、マジョリティ日本人男性が想像する力を獲得するような、脱植民化の理論と実践であり、それは差し当たりその立場にない者にも脱植民化へと喚起するものを持つものである。

第 1 節 植民化の機制の探究：中村勝『捕囚』

脱植民化の探究に関して、帝国日本の台湾統治、特に「理蕃」政策と高地台湾先住民族の動きを分析した研究が中村勝により精力的になされている（中村は一貫して「先住民（former-inhabitants）」の語を使用）。『台湾高地先住民の歴史人類学：清朝・日帝初期統治政策の研究』（2003）、『「愛国」と「他者」：台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ』（2006）、そして本稿で主に取りあげる『捕囚』（2009）であり、日帝期台湾先住民族史のひとつの到達点を画している。

いずれも歴史実証的には、1930年の霧社事件に至るまでの時期を検討しているが、『捕囚』で注目されるのは植民化の原理的探究に紙数を費やしている点である。『捕囚』は、日本と台湾双方における資本と天皇制近代国家の植民主義的展開を、日本と台湾先住民の関係で描いている。「捕囚」とは、日本資本と結託した植民国家（「植民国家資本」）による台湾先住民の土地の収奪（expropriation）、その上で「出役」として強制される労働力搾取（exploitation）、統制された「蕃社」への「移住集団」化と「蕃童」教育（「社会の学校化」）を中心に展開する生の「囲い込み」（enclosure）の総状況を言い、中村はこの状況を植民国家資本の原始的蓄積（primitive accumulation）過程に規定されるものと見る³⁾。日本植民国家資本が台湾先住民から収奪したものは生産手段とし

3) 中村は、帝国日本の植民地支配に取り込まれる前の台湾先住民のあり方を「主体的自然」と名づけている。台湾先住民の主体的自然は、植民国家－資本の「社会的権力」により収奪され、隷属的「捕囚」状態へ変容を余儀なくされる。例えば中村は、三井合名会社と「理蕃」行政が協力し、台北州の「屈尺蕃」に対して土地収奪と夫役の労働者化を強制していったことを実証している（第7章第4節）。なお原始的蓄積が資本主義の初期段階にあるのではなく、資本主義の発展と共に継続するという視角（「継続的本源的蓄積」）はマリア・ミースとクラウディア・V・ヴェールホフによって提出されている

ての土地だけではなく、生活とその従来の生全体（主体的自然）を含めてのものであり、これを中村は端的に「生の原収奪」（例えば55頁）と呼んでいる。本稿副題の「台湾先住民族を囲む植民国家資本の機制」とは、こうした事態を指すものである。蓄積されるべき資本とは、国家と資本の主権権力に支配され従属する労働者が形成する社会関係でもあった（65頁）⁴⁾。

植民地台湾、特に先住民族との関係において近代日本の所業を自省的にふり返るという点で、津島（1947年生）と中村（1944年生）という同世代の最近の作品は重なり合っており、600ページを超える中村の『捕囚』を一節で整理することはもとより困難であることを知りつつ、ここでは記憶と歴史の認識追究の仕方を植民統治責任のとり方というスタンスから整理しておきたい。

津島の小説では、日本人と台湾住民、特に台湾先住民族との支配／被支配者という両者の節合（articulation）が、女性による記憶、特に暴力の記憶の分有によりなされる⁵⁾。『あまりに野蛮な』と、資本制の政治経済的分析を重点に精神・心意構造を見据え脱植民化を志向する中村勝の史的分析が、植民地の人間と土地とモノと生の収奪と植民暴力の想像と分有という点で節合されうるであろう。両者の重点の違いは、女性と男性、死と資本、家庭と国家、記憶と歴史といった点にあると言える

（ミース、ヴェールホフ、トムゼン 1995、石原 2007: 77-8も参照）。

4) 植民地の原蓄＝原収奪は「人間の掃き捨てとしては物質的であると同時に、その意識（感情）を必然的にともなう倫理的過程」でもある（63頁）。

5) 分有とは、フランスの哲学者ジャン＝リュック・ナンシーが『声の分割(パルタージェ)』(原著1982)と『無為の共同体』(原著1986)において考察した概念“partage”の日本語訳である（ここでは後者の邦訳を採用）。二者の「間に切れ目だけがあり、両者を分かちその切れ目を双方が共有しているというようなあり方」を指す（西谷 2002: 130）。死という出来事の「共有」や「理解」という事態を考えてみれば分かるが、それは通常の意味での「共有」や「理解」ではありえず、西谷のこのような表現とならざるをえない。分有は通常の意味での「共有」ではなく、分離かつ共有という事態である。岡真理（2000）はこの概念を定義しないまま使っているが、ともすれば意思的・意識的・選択的な行為として設定されているように見受けられる。この岡的な「分有」の使用を、「ナイーブ」で「ナルシズム」的色彩を持つと私信で評したのは山本達也氏である（加藤 1999も参照）。記して感謝します。分有と中村の言う「受動的実践」「主体的自然」は極めて近似した概念だと考えられるが、これについては稿を改めたい。

が、それは固定的なものではなく各々は相互に通じる面を持つ。『あまりに野蛮な』から言うと歴史に還元されない、記憶の確固とした領域があると考えられる。資本制は、死に付随する医療や葬式など様々な文化に関与するが、『あまりに野蛮な』で描かれるような子どもを喪失するという経験そのものは、さしあたり資本に還元されえない固有の領域だ。資本制と天皇制、ナショナリズムは日本人の生を規定してきたが、ただしその分析にのみ還元され得ない、ひとりひとりの固有の生きられた経験 (lived experience) がある。そこにはひとりひとりの固有の痛みに寄り添うような言葉が求められなければならない、津島の『あまりに野蛮な』は、二人の日本人女性主人公であるミーチャとリーリーの経験と思いに対して、そのような言葉を模索していると考えられる。

一方、中村の歴史人類学は、津島が死と「家」「家族」「家庭」の内実を含め主題化しようとするさまざまな「野蛮」のうち、国家と資本の結託と台湾先住民主体への影響の史的分析に向かう。この主体は、国家に規定され国家と表裏一体の「民族Nation」ならぬそれ以前の血縁による「民属Volk」の「主体的自然」と分析・概念化される⁶⁾。『捕囚』は浩瀚な史料を用い、先住民の主体的自然が植民国家資本に捕囚化される様を、主として1874年の「台湾出兵」時の先住民の物売りの少女の斬殺事件から「1930年闘争」(いわゆる霧社事件)に至る1920年代までを実証する⁷⁾。中村の歴史人類学的記述は、津島が既存の研究に頼りながら1930年の霧社事件を題材化した『あまりに野蛮な』の前史を扱うものであると同時に、植民国家への抵抗の敗北とも読みうる先住「民属」主体の変容を大きく規定した、植民国家資本を分析したものである。

6) 「民属」は、村井康男と村田陽一が1954年に翻訳したエンゲルスの『家族、私有財産および国家の起源』(原著1884年、邦訳大月書店国民文庫)に拠っている(中村勝 2009: lvi, 第5章第2節)。村井・村田の訳者解説(1954)、またエンゲルス同書の「民属」「民族」理論を整理した上野俊樹(1988)も参照。

7) この主体的自然の実践(中村は「受動的実践」とする)については、官命の下山移住に抵抗した「ビヤハウ社」タイヤルの頭目(ムルフー)「ウイランタイヤ」、官命使役労働に抗したブヌン族「イカノバン社」の「ラマタセンセン」、イレズミをしたタイヤル女性で「蕃語講習所」講師を務めた「ヤユツペリヤ」に見られるとしている。これらの者に対峙する存在が、「理蕃」の社会的権力に従属して生きる「先覚者」たちと認識される。

以上のように中村『捕囚』は、植民化の原因を植民国家資本の運動にあると見て、そのメカニズム（機制）の解明を行なう。中村の議論から、台湾先住民族と日本人の脱植民化は、植民国家資本の暴力と捕囚化の歴史を認識し、そこからの脱却にあることが導き出される。その際、中村が見出したものは、植民化の圧倒的な力の中において、絶望的武力抵抗に走るのではなく、また進んで国家資本による体制に順応していくのでもない、「受動的実践」の態度であった。以上を踏まえ、直接の植民地統治を経験していない世代の台湾人と日本人によって描かれた、台湾先住民族についての近年の小説を取り上げよう。脱植民化は、植民化のロジックと歴史を認識することと同時に、現在、漢人や日本人がどのように台湾先住民族と出会い、植民化の歴史が現在の先住民族にいかに関与を与えているかを想像し理解しようとする地点から始まる。漢人や日本人というマジョリティがいかに自らの脱植民化を進めていくかを考える上で、舞鶴と津島佑子のテキストは豊かな議論の源泉となるものであろう。

第 2 節 植民暴力への対応 I：舞鶴『余生』

小説『余生』は、霧社事件を題材に文学とフィールドワーク・ルポルタージュを融合する境地を切り開いた。外部の人間が霧社事件とその後のサバイバーの生という「他者」の内部をいかに想像することができるかという点で、戦後台湾における霧社事件の解釈の枠組みを作り変える力を持った作品であり（周 2010）、脱植民化を志向する日本に紹介される価値のある文献といえる。中国語により書かれたこの小説の題名である「余生」^{ユージェン}は、小説中に「劫後餘生」（災難にも死なず生き残った命）としてたびたび登場するように、災難から「幸いに生き残った命」という意味である。本稿での訳語は「生き残された生」、煩雑さを回避したい場合単に「余生」とする。「余生」とした場合、日本語に存在する「盛りの時期を過ぎた残りの生涯」という意味ではないことを理解願いたい。小説『余生』は霧社事件のサバイバーの生に寄り添いつつ、事件

の原因とその影響、さらには癒しを模索するものであり、重層的な植民暴力が引き起こしたものの総体への対応としての記述をなしている。

1. 霧社事件の現在性と「余生」

舞鶴は「後記」や小説で、小説のテーマについて自ら確認するように述べている。その一つが「私が住んだ集落で見聞きした余生、生き残された生」であり、霧社事件の現在性である。霧社事件の原因と正当性、そして舞鶴が住んだ集落の隣人である「娘さんゲーニヤン（姑娘）⁸⁾」の「遡行の旅」（追尋之行）という二つと共に、本小説はこれらの三つのテーマを往還しながら進行する。舞鶴は言っている。「私はこの三つを、何度も重複しつつ一気呵成に書き上げた。それは（中略）この三者の意味内包がすべて『生き残された生』の同時性の裡にあるからである」（251頁）。

舞鶴の言う三者の「同時性」について補足しよう。それには、まずこの小説において度々言及される「現代の霧社事件」という視角について述べなければならない（「現代の」は中国語で「當代」）。なお、句点をほとんど使用しない晦渋な舞鶴の文体は、できる限りそれを読者に伝えるように、同時にある程度に分かりやすさを念頭において翻訳した。

現代が呼ぶ現代の歴史は私に、多くの疑問と議論すべき点がある事件を「過去形の」永遠にしまうことに注意を喚起し、それを引っ張り出し現代という陽光の下にさらけ出し、「現在形」のものとする必要があり、そうして過去の歴史は生き生きとした現代の歴史のひとつの支流となり、「現代」は肉付きのよい乳房または臀部の如きすなわち現代と呼ぶに耐える豊饒となり、であるから「現代の霧社事件」あるいは「霧社事件が現代にあるということ」はごまかしや冗談ではなく、それはこの小説の主題であるだけでなく適切な歴史観でもある……（85頁）

霧社事件の正当性と「生き残された者たちの生」は、「娘さん」の

8) 「姑娘」は「未婚の娘」と同時に「娼妓」の意味を持つ言葉であり、本稿では暫定的に「娘さん」と訳しておく。川中島（現在の南投県「清流」集落）で生まれ育った「娘さん」は、長年の「平地」での暮らしで娼妓となっていたことが示唆されている。

「遡行の旅」を主軸とした、また同時にさまざまに聞き書かれる「余生」の記述において展開される。そこでの時間概念とは、過去が現在に至るという直線的なイメージではない。上に書かれるように、豊かな現在に入り混じったものとして過去が登場し描かれることになる。

「霧社事件」決起の正当性は植民政策、特にセデック民族を骨抜きにする同化政策の批判に置かれる。また、日本植民地統治終了後の中華民国体制における同化政策への批判が、セデック人たちの生き残りの生を物語る中で展開されている。日本と「中国」の同化政策は、舞鶴の「現代の霧社事件」あるいは「霧社事件の現代」という観点から、つまりセデック人たちが現在「余生」を生きる描写の中で描かれる。霧社事件の多くの生き残りの人々とその子孫が、天皇のために義勇志願し南洋の戦場に赴いたこと。1970、80年代には台北の寶斗里（華西街近く）の娼妓たちに多くの（セデック人を含めた）タイヤルの少女たちがいたこと（116頁）。舞鶴は小説の登場人物に「90年代は反同化と同時に、同化が最も早く進んだ時期でもある」（187頁）と語らせている。コンビニエンスストア「7-11」やファーストフードの「Mバーガー」、百貨店といった消費主義と資本主義文化に、セデック人たちが飲み込まれる様を描く。

2. 遡行の旅

「遡行の旅」は、霧社事件の生き残り子孫で、「平地」に降りてから様々なことを経験してきた「娘さん」が、心の平静を得るものとして登場する（202頁）。主人公の「私」がそのように心を砕くのである。「遡行の旅」は中国語の原文では「追尋之行」であるが、「溯之旅」（110頁）という表現もあり、ここではそのように訳出した。「娘さん」は遡行の旅の途中、自分が決起の首謀者と見なされているマヘボ社頭目のモーナ・ルーダオの孫娘であると告白する（43、211頁）。そしてこの旅は、「祖先の霊」つまり祖霊を求める旅としても登場する。遡行の旅は祖霊を求める精神的なものであり、同時に具体的な肉体移動を伴う形式的かつ儀式的な旅である。祖霊は霧社事件後、頭目モーナ・ルーダオらが立てこもったマヘボの奥山、そしてさらに奥の合歡山や奇萊山にいる

と想像され、遡行の旅はブセガン溪を遡ってそれらの奥山を目指すものである(204頁)。出発点は、作家である「私」がフィールドワークと研究と執筆のために住んでいる川中島(清流)である。心の平静を得るということは、舞鶴が注意を払って記述している「思索」の重要性(212頁)につながる。遡行とはこのように精神的な旅でもある。

3. 記念碑、「余生」の碑

舞鶴は、霧社事件で決起しその後サバイバーが強制移住させられた川中島に住み、人々の「生き残された生」すなわち「余生」の重要性を認識し、それを小説の題名とした。この認識に至った大きなきっかけは、川中島に立てられた「余生の碑」との出会いである。

余生の碑の周りとは側には高い杉の木が対称的に並び、平らな山とへこんだ台地があり、厚く苔むした二つの灯籠はそれがかつて「神社」のものであったことを示し、「天皇」の栄光が去った後十余年にして人々は黙って謙虚に一つの「余生の碑」を建てた、小学生くらいの高さで、健康な小学生に似た体つきで、純粋に人を感動させ、不平を言ってわめいたりまた栄達の輝きを誇ることなく。私は偶然に川中島に来たのではない、純粋に「余生」この二文字が私をここに住まわせたのだ……(185頁)。

「余生の碑」の謙虚さは、大戦後の中華民国による体制の中で政府の立てた記念碑との対比にあって際立つものである。これまで中華民国政府は「先住民抗日の像」「モーナ・ルーダオ像」「モーナ・ルーダオ烈士之墓」を霧社に立ててきた。更に遡れば日本統治時代には、日本人のための「霧社事件殉難殉職者之墓」が立てられていたが、戦後取り壊された。

政府の立てた記念碑のそばのモーナ・ルーダオの像は歴史の英雄であり現代の偶像であり、現在政府も申し訳程度に取り扱うことの退屈さとナンセンスさを認識し次第に英雄の偶像を破棄するようになり、今日島国の至る所のゴミ処理場と墓場の中にはどれだけの彫像あるいは銅像が眠っているだろうか……(117頁)。

舞鶴は国家による事件の解釈枠組みに批判的な目を向け、生き残りの生の裡に事件と歴史を見ようとする。総統蒋介石の銅像は中華民国時代の台湾で無数に立てられた。「抗日英雄」としてのモーナ・ルーダオの銅像が立てられることで、「余生」を静かに生きる人々の姿が逆に見えにくくなっているのではないか。そのような声がこの小説からは聞こえてくる。生き残りの生を想像させてくれるきっかけとなり、その探求のそばに居続けるものとして、小学生くらいの高さの、謙虚な姿で静かに立つ「余生の碑」がある。舞鶴たちの遡行の旅を見守り支えるものとしてこの碑が立っている⁹⁾。

以上のように、舞鶴の『余生』は、自らのフィールドワークにおいて接した生き残りの人々の視点から、霧社事件と植民されてきた経験を語るという新しい試みである。第5節で見るように、生き残りの人々の視点を獲得することは容易なことではないが、執筆者自らの位置から川中島の「余生」の経験の理解の志向性を書き込むその試みは、評価されるものである。それは、国家による国民史への事件の取り込みに抗するものであり、遡行の旅での祖霊との対話の過程の中で、これまでの川中島のセデックの死者を含めた人々の経験を、漢人とセデック人が共に想像する記述である。

第 3 節 植民暴力への対応Ⅱ：津島佑子『あまりに野蛮な』

津島佑子の小説『あまりに野蛮な』は、日本女性の体験を日本女性が自ら語り直すと同時に、それが台湾先住民族への植民化の暴力の体験の想像と重ねられて行なわれるものとなっている。そこでは、現行民法に照らして国家による承認を受けずに男性との間に子を持ったが、それを

9) なお余生の碑は、舞鶴が『余生』を脱稿後の1999年9月の大地震により、新しいものに換えられた(劉還月ブログ「『余生』之後再浩劫：你見過那一塊川中島『餘生紀念碑』？」など参照、ただし本ブログは2010年1月参照後閉鎖されている)。またここで詳述は出来ないが、国家による顕彰と記憶の問題、記憶が開く新しい関係性の問題、正義の問題を喚起する記憶といった主題群について、富山一郎編(2006)、岩崎稔(2008)を参照されたい。

亡くすという経験をもつ女性を中心に据えられる。本小説は、それぞれ1930年代と2000年代におけるそのような「ミーチャ」「リーリー」という日本女性の立場から脱植民的な想像を豊かに行うが、大きな核心は国民再生産を担わされてきた「家庭」からの脱出と、民族と性別をのり越える、人々の新たな親密な関係の構築にある。深尾葉子（2009）がいう「魂の脱植民地化」を実践するものと言える（注2参照）。暴力の経験を分有する回路は、自身の痛みを伴う経験の上になされる、マジカルリアリスティックな死者との交感と、国家に規定されない擬似親族的関係の創出によって新たに開かれるだろう¹⁰⁾。

1. 植民国家における母性と家庭

「モダンガール」（伊藤他編 2010）と呼ばれたような東京の流行最前線には気後れしつつも、洋服が好きで、椅子は能率が上がると考える1930年代のミーチャ（上38）は、恋愛結婚をする「新しい女」の系譜を引きつつ、中流階層の家庭主婦をまじめに務める良妻賢母を目指した女性だった¹¹⁾。同時に、母性を母に特有のものとする夫明彦の想像上の意見に反論して、「実際には人間の場合もつと複雑な感情があるのではないか。母性愛という耳障りで漠然とした言葉で猿や鳥と同じに片付けられるのはどうにも切ない」（下114）と、外部からの型の押し付けには反発を見せることもある。この、型の押し付けが、夫と義母からなされ、ミーチャとの間で確執が継続する。

ミーチャが奮闘した舞台は、植民地台湾における「家庭」家族だった。一方2000年代の主人公リーリーは「リビングのある家」（後述）を離れて、心身の居場所を求める旅に出る。二人の主人公においては、家庭との距離のとり方が大きな主題となる。植民地には日本式の「茶の間

10) 『あまりに野蛮な』は、時代を超越した「私」により物語られる「粹小説（粹物語）」であり、1930年代と2000年代の二つの時代が24の章により語られる。各章からの引用は、「二十」のように記し、ページ数は「上下（巻）＋ページ数」として表記する。

11) 「タイホク」で暮らし始め数ヶ月目のミーチャの日記には、「どんな家を、どんな庭を、そしてどんな生活を私は夢見てゐたのだらう」（上168）と書かれる。「庭にはバラが咲き乱れ窓には白いレースのカーテンがそよぎドレスを着た私は坊に寄り添ひ音楽にうつとり耳を傾ける？」というように、幸せな家庭が疑問符をつけられながら想像される。

のある家」が数多く建てられたが(西川 2000: 36)、ミーチャの家も「茶の間」のある家だった¹²⁾。西川祐子(2000)によると、日本で「家庭」が重要性を増してくるのが第一次大戦(1914-15年)後のことだ。このころから都市の人口増加が進み、中産階級が規模を持って成立し、「家」家族ではなく「家庭」家族が都市を中心に実体化していった。給与所得者が増すにつれて、「家庭」家族は「本土」の大都市だけでなく植民地においても飛躍的に増えていく(同上: 21)。日本型近代家族の特徴は「家庭」概念とその物理的イエの実現であり、「茶の間のある家」モデルの普及がはじまった1920年から「リビングのある家」モデルが完成した1975年の間が、色濃く「家庭」家族の時代であった(同上: 61)。

ロマンティックな恋愛を実践し、相補的で協力しあう夫婦関係、子を核とした愛情深い家族関係などを特徴とする、20世紀前半に登場し現代に至るまで影響力を持った新しい家族を、牟田和恵(2006)は「ジェンダー家族」と呼んでいる。上記西川の「家庭」家族に重なる概念だ。この背景には、国家が人間の「生」と「性」をターゲットとしつつ、「国民」として取り込んでいく近代的な統治技術の東アジアへの普及があった¹³⁾。このジェンダー家族の主役となったのが「新しい女」の系譜を引く女性たちであり、ジェンダー家族により実践される家庭は、第一次大戦後の産業化と、都市への人口集中、俸給生活者である新中間層により現実化していく(牟田 2006: 80-84)。1930年代のミーチャは、台北という日本の植民地において形成されつつあったジェンダー家族的な家庭において、悲劇の主人公または犠牲者となったのであり、70年後のリーリーは「ジェンダー家族を超えて」(牟田 2006の題名)、脱植民的な関

12) 確認できるのは、台所、風呂場、明彦の書斎、寝間、玄関わきの納戸部屋である(女中部屋は確認できない)。初めて来た台湾人女中のメイメイは週5日間を住み込み(上318)、納戸部屋で寝ている(上323)。台湾人女中のタマさんは近くの自分の家から通っている(「二十」)。

13) 「お国のためにこうしてがんばって赤んぼを産むんですから、総督府から賞状をいただけるかもしれないわ。あら、いやだ。こんなのもちろん、冗談よ」(出産直前のマダム池田の会話、下267)という記述は、国民としての生殖の実践かつそれをずらすものと読める。

係性を台湾の人々や死者と形成する。

2. 植民地状況と収奪、日本人として背負うもの

ギー ルン

1934年秋、日本から帰台したミーチャは基隆港で下船前に荷物検査を受ける。トランクの中から明彦の母親が買って詰めてくれたモノが次々に取り出され、ミーチャはうろたえて泣き出したくなる。「あれもこれもおぼえのないものが、どうしてこんなにたくさん、わたしのトランクに詰めこまれているのだろう。盗んだ品物だと疑われ否定できそうにない」。「わたしは盗っ人です、つみびとです、ごめんなさい、お許してください」という言葉が出かかる（「二十」）。

西川（2000）によれば、近代国家にとって重要課題である国民としての中間層の形成と国民再生産を担う家族形成は、植民地からの収奪があって初めて可能となる。日本型近代家族が「家」家族から「家庭」家族へ移行する際、植民地の存在が大きな役割を果たした。戦前の日本の大都市において、貧困ラインすれすれの生活をしていた若い男女が、植民地においては特別手当のつく給料を得て、現地の家事使用人を多数使う中流の家庭生活を営むということがしばしばあった（西川2000:248）。そしてこの「家」家族から「家庭」家族への移行は、国民動員の要請の下、戦時下において進化した（同上：22）¹⁴⁾。ここでいう「戦時下」は狭義には十五年戦争を指すだろうが、台湾の文脈においては継続して戦争、鎮圧と占領を引き起こしてきた「植民体制下」と広義に読みかえることが出来る。日本社会の新中間層の育成には「経済発展」がどこまでも続くことが必要だったのであり、「家庭」家族の成立は植民地収奪の上に成立していた（同上：37）。

ミーチャはこの「収奪」を敏感に察知しており、無論それは作者津島の感知であり、上の基隆港の描写は植民者日本人が背負っているものの

14) 家庭という女性固有の領域が誕生し、女性が家庭内役割の責任主体として捉えられることそのものが、女性の国民化をうながす回路となっていた（小山 1999: 256）。選挙権を持っていない女性は、二流国民という差別を受けながら植民者日本人として国民化されたと言える。

表現である。ここで、背負うものという表現は、植民地近代化を評価する立場からは富を表わし、それを批判的に見る側からは被植民者に返済すべきものとなる。上記の描写は植民地状況の構造が個人の言動と経験に重ねられて表現されている部分であり、この点は前述の中村勝の植民地収奪―「捕囚」論へと節合される。

3. 2000年代日本人女性の台湾の旅：リーリーとヤンさん

2000年代の物語は、ミーチャの姪に当たる日本人中年女性のリーリーを中心に展開する。リーリーは、伯母のミーチャに顔がそっくりと言われて育ち、若くして他界したミーチャの残した書簡を読んで、「台湾の山にあこがれつづけていた、わたしのお婆のタマシイを、ここまで運んであげたい、と思って」いる（下99）。リーリーは自分の両親の離婚により「男親と縁がなかった」と明らかにしており、他の女性とも付き合いのあった男性との間に、「いいかげんな出産」をした。さらに17年前、その子どもが11歳だった時に亡くしている（「二十三」）。

客家人中年男性のヤンさんはリーリーとの会話の中で、両親が離婚し「男親とは縁がなかった」ため、父という存在についてよく分からないと明かしている（下290）。ヤンさんは「アマガエル」を思わせる容姿をもち、「たどたどしい日本語」と共に、「男性」としてリーリーを脅かす要素を「抜き取られ」ている（坂元 2009: 121）。仕事にまい進し学術的成功と昇進を目標とする明彦（ミーチャの夫）と比べると、ヤンさんの仕事に対する態度は強度を持ったものではなく、女性化あるいは中性化されたイメージを醸す。ヤンさんには、妻と子どもを事故で亡くすという過去があった。こうしたヤンさんが体現する「ニセモノの父」とは、本当の血縁がないがそのフリをしている父であり、いわば擬制的血縁関係によって、民族と性別を超えた人間関係を新たに生み出す存在だ。

天皇制植民国家により台湾が席卷された歴史背景を導入すれば、天皇は家族国家観を現実化させた帝国日本において、家長としていわば「ニセモノの父」となって植民地支配を貫徹しようとしたと言えよう。ヤンさんがそのような天皇と異なるのは、それが「文明／野蛮」といった図

式に結びつかず、他者を啓蒙し指導するのではなく、他者との繊細な交感の関係を生み出す点にある。植民者と被植民者間の天皇制イデオロギーによる心的な紐帯こそが、家族国家帝国日本の支配の核心のひとつであるが（中村等 1997；中村勝 2003, 2009）、『あまりに野蛮な』はまさに心的な紐帯を国家から取り返す試みとしてある。リーリーが戸籍を入れずに男性との間に子を設けたことの意味も、国家との関連で推測できる。戸籍を入れるという国家の承認と保護を求める行為をあえて行わないということは、親密なつながりを国家を媒介せずに自らの手で織り成していくという意味が込められているものとして読める。

『あまりに野蛮な』が扱っている野蛮と暴力は、植民支配の暴力とそれに対する抵抗の暴力や宗教文化的な齧首（首狩り）の暴力、更に結婚生活における言葉の暴力や性的な暴力など、様々な側面を含んでいる（津島は「野蛮」の語を使用している）。その中で浮かび上がるものの一つに、植民男性的暴力がある。これは宮地尚子（2005）が言うようにジェンダー化された暴力であり、男性文化的という意味で「男制」と言うことが相応しいものである。植民男性的暴力は、『捕囚』からは資本と国家が結託する帝国—植民化の社会的権力の実践、端的に軍国主義の発露として読み取れる。ローザ・ルクセンブルグ『資本蓄積論』において軍国主義と帝国主義は、資本の原初的蓄積過程の政治的（国家により媒介される）現れとされ、軍国主義は蓄積の一領域と言われていた（2001: 201, 214）。

『あまりに野蛮な』からは、中性的に設定される客家人のヤンさんについての描写に見られるように、死の痛みと喪失に向き合うところから抑圧的でない関係性が切りひらかれ、植民男性的暴力の乗り越えが示唆される。『捕囚』が日本の植民統治と暴虐の責任を資本と国家の絡み合いの歴史に求める一方、『あまりに野蛮な』は植民統治の暴力を日本人女性個々人の痛みから分有し乗り越えようとする¹⁵⁾。

15) 植民男性的暴力という表現は、天皇制とジェンダーに関しての加納実紀代（2002）の議論を踏まえれば、今後更なる概念の精緻化が求められるだろう。加納は日本近代の家長制と天皇制について、ヨーロッパのように家長制自体で「屹立する」ものではなく、天皇も父たちも、「母」に支えられ、「立てられる」ことによって家長としての権威を保持していたと主張している（128頁）。そこには日本民衆自身の心にひそむ「母なるもの」への共同幻想が存在し、それを結実体现したものが天皇であるという視

4. マジカルリアリズムによる死者との交感

『あまりに野蛮な』は「父の記憶を引き継ぐ娘たち」をモチーフにしている、と坂元さおり（2009）は指摘している。日本軍「慰安婦」について言及している箇所では、日本の兵隊が台湾先住民の娘を閉じ込めて、多くの日本人が台湾で父親になったとされている。ヤンさんはここで「これは父親の話ですね」と語る（下304-5）。

このモチーフに加え、本報告が脱植民化と関わって注目したいもうひとつの重要なモチーフが、死者との交感である。死者たちとの交感の描写においては、「野蛮」による暴力と死の記憶の「分有」が一つのクライマックスであり、それは台湾先住民族の口承文芸が女性によって語り直される形をとっている。本書における死者たちとは、1930年の霧社事件における日本人と台湾先住民族セデック人の死者であり、事件決起のリーダーとされるモーナ・ルーダオであり、主人公の一人である日本女性「ミーチャ」とその姪の「リーリー」が失った子どもであり、ミーチャの亡くなった父や兄弟ら家族である。そして更には、津島自身が小説のテーマとして書き続けている、自らの失った子どもである¹⁶⁾。

死者たちと交感する際に登場する台湾の「蕃人」「原住民」、つまり台湾先住民族のイメージに注意したい。台湾先住民族のイメージは、ミーチャ、日本人、そして読者にここではないどこかに通じる道を切りひらき示してくれる、力を持った存在として描かれる。ここではないどこかとは、死者の世界であり解放された理想的な世界である。台湾先住民族のイメージは、首を狩るという「野蛮」を兼ねる強い力を持つ、期待と同時に「おそれ」を感じさせる存在である¹⁷⁾。

『あまりに野蛮な』のこのような記述は、オリエンタリズムと帝国主義

角が提出される（139頁）。この点については、第8回韓国日本学聯合会にて徐東周氏にコメントをいただいた。

- 16) 津島は「手続き上の結婚」を経ていない男性との子を、38歳の時に実際に亡くしており（与那覇編 2006）、そのことを小説のテーマにしてきた。
- 17) ミーチャと語り手は、日本人にとってのモーナ・ルーダオの存在について、「絶滅した日本オオカミに寄せる思いに似た、『未開の世界』に対するなにかしらの期待とおそれに変わりつつあった」（上151）と述べている。

的なノスタルジアに彩られた植民主義的なものであり、当時の日本人の「蕃人」認識を描いてはいるが、それだけならこの小説は植民主義を回復するものとして批判されるはずだ。しかし津島はこの危険な記述と同時に、脱植民的な想像 (decolonial imagination) を実践する記述に出ている。まず、現代の台湾先住民族は「原住民」としてすべて括弧がつけられていることに注目したい。それは、先住民族自身が中国語で「原住民族」を自称してきた権利獲得運動の歴史が存在し (中村平 2009を参照)、日本語に残る「原住民」の差別的な語感と区別して用いるためだと考えられる。

津島の脱植民的な想像は、夢と現実が重なる世界における死者との交感において、マジカルリアリスティックに描かれる。その他にも、山梨という「田舎」出身の「野蛮な」女性、「山」によりつながる山梨と台湾のイメージ、そして性器に歯を持つ女性像 (後述) というスタンスからの記述がなされる。津島は、山梨で生まれ育ったミーチャに、「私の家族は皆未開の蛮人みたい」 (上162) と述べさせている。山梨と台湾山地は「山」のイメージによりつなげられる (上316) 18)。

ミーチャは台湾へ向かう船の中で、霧社事件で首を吊って亡くなった「蕃人」たちを想像する。「どんな歌なのかさっぱりわからないけれど、霧社の山のあちこちにひびいたという『別れの歌』に、蓬莱丸の二等和室のなかでミーチャは耳を傾ける。数えきれない大小の首吊り死体の影が、その歌に合わせて揺れる」 (下157)。ミーチャはまた、霧社事件で生き残りとなった娘マホンの、父モーナに対する思いを想像する (上314)。

一方リーリーにとっては、誰かは明示されない死者が、三匹のチョウとなって夢としても現実にも登場する (「十七」)。「さっきからずっと、おばもこの場にいるような、そんな気がしています。……それに、わたしの子どもも……」 (下99)。パイワン族の盲目の老女、ムトクト

18) リーリーは「母もおばも日本の山育ちで、海を知らない田舎者だとずいぶんばかにされながら、それでも、やっぱり山が好きだったんです。わたしも山が好きです」と述べている (下92)。この「山」のイメージには、名馬の産地である山梨を思わせる躍動感ある馬の描写が重ねあわされる (「十四」)。

クさんは言う。「このチョウは、死んだひとたちの声なの」(下101-2)。またリーリーが住んでいた東京の家は、亡くなった母や子どもが自分を呼ぶ声が柱からも、天井からも聞こえてくる。「それで、いつも耳が痛くて、全身が痛くて、どこを向けばいいかわからなくなった」(下103-4)。このようなリーリーとムトクトクさんの「悲しみが同じ」(ヤンさんの言葉、下169)だから、リーリーとムトクトクさんは会う運命にあったとされる。

ヤンさんとの交流を含め、リーリーが体現する脱植民的な関係性は、齋藤純一らの言う「親密圏」の作り直しと言える。親密圏とは、大まかに定義をすると、顔の見える具体的な他者への配慮と関心を媒介とする親密な関係性を言う(齋藤編 2003)。親密圏は「変容する家族」といった既存の認識枠組みを超える動きを名づけたものであるが、リーリーが体現する親密圏は、リビングのある家を離れて、国家に依存せず、死者をもその範疇に含み、近代家族の範囲内でのロマンチック・ラブとも距離を置くものである¹⁹⁾。リーリーが親近感を抱き、新たな関係を結ぶことになるミーチャは、リーリーの伯母であるのだが、それは母方の伯母である。このことも、男系(父系)に捉われない関係の築き方という意味でひとつの示唆を与えている。

閉塞感と孤独、暑さと抑圧を感じ、万引きして捕まったミーチャは、マラリアの影響もあって、意識の中で熱い水、熱い海の底に沈みこんでいく。その中で雲豹やキョン、熊たちとの交感が始まり、馬たちがミーチャを外へ連れ出すべく迎えに来る(「二十四」)。その中でミーチャは自分の首を切ってしまい、その首は三つ目の太陽となって世界を熱にさらす。ミーチャは何者かに「この世界を、わたしたちは修復しなければ」と呼びかけられ、命という命が焼き尽くされるように「めっちゃくちゃになってしまった世界を守る」のは自分の「責任」なのだと考える

19) ロマンチック・ラブと距離を置く点であるが、それは性的なもの(セクシュアリティ)を排除するものではないだろう。『あまりに野蛮な』のセクシュアリティは、ミーチャと明彦夫婦が織り成す近代家族の範囲内のもの为中心となり、ヤンさんとの関係では直接には記述されていない。ヤンさんとの関係は、坂元さおり(2009)が指摘するように擬似的な父と娘の関係である。家族という枠組みに捉われないセクシュアリティの豊かな描写は、津島の別の小説『山を走る女』(1980)に見られる。

(下331)。

この小説のクライマックスは、ミーチャとリーリーが夢のような世界で70年の時空を越えて出会い直し、死んだ台湾人のメイメイ、モーナ・ルーダオの妹のテワス、そしてモーナと一体となったヤンさんが合流する場面だ(「二十四」)。これらの人々はミーチャとリーリーにとって強く心に残った人々だ。いつの間にかミーチャとリーリー、ヤンさんの背中には、亡くなった子どもたちが赤ん坊となって背負われている。女性4人と男性1人の一行5名は、台湾先住民族の「太陽を射る話」のように、三つの太陽を射るために歩き出す。死者に「憑かれた」者たちが夢の中で死者の声を聞き、共に手を取り合い新しい世界に歩みだすイメージが、相反するものをつなげるマジカルリアリズムの力を借りることにより豊かに描き出されている²⁰⁾。

5. 女性が語り直す物語

『あまりに野蛮な』における「性器に歯の生えた女性」と「うつぼ舟」²¹⁾、「太陽を射る話」のモチーフは、女性とは何者かという物語の、女性による語り直しを体現している。「性器に歯の生えた女性」の物語は、台湾のみならず世界的に伝播し語り継がれている口頭伝承である(金関 1976)²²⁾。小松和彦(Komatsu 1987)はこの物語(‘Vagina Dentata’)の伝播と普及の心理学的背景として、男性自身が男性優越的な社会支配を不安に感じ、コントロールしきれない他者性を「自然」に近く怖ろしい女性というイメージに投影し、それを男性が再秩序化するも

20) マジカルリアリズム(マジック・リアリズム)は、非同一的にして相反するものを、包摂しかつ新しいものとして現前させるものである(春日 2009)。この小説において非同一的かつ相反するものとは、「日本/台湾」、「文明/野蛮」、「夢/現実」、「生者/死者」、「男性/女性」などである。これらの相反するものを、『あまりに野蛮な』は、夢とうつつの境界が溶解するような心理的な痛みをリアルに表現し、野蛮と暴力の経験を癒し、新たなつながりを求める語りとして現前させている。また死や死者があふれる本小説が全体のトーンとして暗さを与えず、むしろユーモラスな印象すら与えるのは、このマジカルリアリズムの技法によると考えられる。

21) 「うつぼ舟」は古代より日本と東アジアに伝わる話で、何者か(しばしば女性である)が密封された小舟に閉じ込められて流されるモチーフを持つものである。

22) この説話と金関論文についてご教示いただいた山田仁史氏に感謝します。

のとして分析する。つまり「性器に歯の生えた女性」の物語とは、女性について男性が語る物語であったといつてよいだろう。女性性器に生えた歯は、主に男性が削るというこの物語の内容を想起してもよい。

『あまりに野蛮な』下巻には「参考文献」が載せられ、『生蕃傳説集』(1923年)が挙げられている。このことから分かるように、津島は現代の語り部として、もとは台湾先住民族が(そしておそらくは先住民男性が)語り継いできた「性器に歯の生えた女性」の物語を、日本女性が台湾とのつながりを確認するものとして語り直している。『生蕃傳説集』は「生蕃」という差別的な書名からも分かるように、佐山融吉²³⁾と大西吉壽という植民者日本人が台湾先住民族から聞き書き編集したものである。このように受け渡されてきた台湾先住民族の物語を、ミーチャ=津島の日本人女性が、女性とは何者かという新しい「私たち」の物語として、語り直しているのである。同じく、台湾先住民族の説話である「太陽を射る話」も語り直されている。「太陽を射る話」は、男が赤ん坊を背負って、つまり世代を超えて、世の中を苦しめる二つに増えた太陽の一つを射落としに行くという話である。この話が津島により、「太陽の巣に向かうのが屈強な青年たちではなく、ひとりの男と、年齢もばらばらな、病弱なミーチャとメイメイを含んだ四人の女たち」と語り直される(下345)。

日本人男性がコロニアリズムとジェンダーを正面から扱った小説を批評するという行為は、批評する自らを対象と切り離して遠隔操作的に行なえるものではない。とすれば、自らの子の生誕と喪失という経験のない男性日本人である私が、津島の「女性が語り直す物語」を更に語り直す意味が生じてくる。このテーマを、子を失った経験を持つ女性だけのこととして、自分と切り離して対象化しないということにつながる²⁴⁾。

23) 臨時台湾旧慣調査会「蕃族科」(1909年設置)の補助委員を務め、『蕃族調査報告書』全8巻(1913-21年)の執筆に当たった人物である(日本順益台湾原住民研究会編 2001: 241-2、山室 2005: 127を参照)。

24) ノンフィクション作家の久田恵は『あまりに野蛮な』の書評(2009年1月4日)において、死者を背負って生きる女性の痛みを描く「この小説を理解できる男なんかいるのだろうか」、「ミーチャの痛みとリーリーの痛みが重なり、そして、女であるところの私の痛みへと連なっていく」と言っている(書評はasahi.comの「書評」欄に掲載、

この小説を味わいこの文章を書く中で、私もミーチャとリーリーの痛みを想像し、そして「母の記憶」、「父の記憶」と私というテーマが、明確に私の中に浮上してきている。それは私を、父と母との関係において新しく作り直してくれるような力をはらむものだ。

読者が最後にテキストを読んでいるように見えながら、実は「次の受け手のためにそれを読まされている」と言うのは、津島の別の長編小説『火の山』を読む山本亮介（2005）であるが、それは『あまりに野蛮な』にも通じる。津島、ミーチャ、リーリーの痛みは、霧社事件や日本の台湾先住民族に対する暴力を想像する行為と平行して、更に私自身の父母双系の家族史の痛みが到来する中で、私に分有（注5参照）される。私は脱植民化運動の中にありながら、この物語を新しく読者に向けて語り直すのである。

第4節 当事者の立場と経験からの記述と読みの脱植民化運動

台湾先住民族への日本による植民化のプロセスを中村勝の研究から、資本と国家のつながりのメカニズムとして把握した。次に、植民化の暴力が起こってしまった後の対応の記述として、舞鶴の小説『余生』を取り上げ、心の平静を求める「遡行の旅」と、国家による顕彰を拒む形の「余生の碑」のあり方を見た。津島佑子の小説『あまりに野蛮な』からは、台湾先住民族に限らず広く流布する神話イメージに乗りながら、国家に捉われた家庭をひとまず離れ、民族と性別、生死の分断を乗り越えるイメージを持つ親密圏の再構築のあり方を見た。

舞鶴は漢人のみならずシラヤという平埔族^{へいは}を出自と認識し、国民軍の暴力を含み自らが経験した痛みを感じながらフィールドワークを行いノートをまとめ、以下のように「平地人—山人」という権力関係を突

2010年10月10日閲覧）。他者の経験、特に痛みを伴う経験は根源的には誰にも理解されえないものかもしれない、自分でも「理解」されえるかは不明とせざるをえない。本稿の基本姿勢は、この久田の提起に日本人男性の立場から回答しようとするものであり、そして「女性の痛み」と同時に「被植民者の痛み」に接近しようとするものである。

きつけられながら霧社事件の「余生」を書いた²⁵⁾。川中島集落に住み始め、調査と研究と記述を始めた舞鶴に、「娘さん」のいとこの女性から批判的な言葉が投げかけられる。「あんた何の研究に来たのさ?」「あたしら先住民はこんなに少なくなくて小さくて、何を研究しようってのさ、あんたら漢人こそ研究したほうがいいんじゃない?」「偉大なる漢民族ダーハン（大漢）をちゃんと研究しなさいよ」（50-1頁）。集落の人からのこうした発言を書き込むことにより、漢民族の小説家であり、事件を研究する者という舞鶴の立つ位置が明確に示されることになる。舞鶴は、そのようにはっきりと言われるまで、「われわれ」漢人が研究の対象になることをすこしも想像しなかったこと、「弱小エスニック・グループ」を研究すればよいという気持ちを抱いて山にやってきたことを告白する²⁶⁾。

一方の津島は、前節で見たように、国家に承認を求めることのない家族のあり方、そして子どもを失うという痛みの経験を見すえ、日本女性の位置から霧社事件の暴力の想像を描き出した。このように舞鶴と津島佑子はそれぞれが自らの立場と自らの経験を見すえ、また台湾先住民族との関係の中で自らの立場を認識させられ、記述を深めている。こうした記述のスタイルは、当事者の立場と経験から自らが関係した歴史へ肉薄するものである。「政策」の歴史からではなく、自らの眼前にあって、自らと関係をもった人々の経験から、歴史に接近し、人々の経験（特に痛みや死の経験）を理解しようとする力が生じている。痛みに寄りそのような記述を厚くしていくことにより、暴力をポルノグラフィカ

25) 舞鶴は、自己アイデンティティを台南生まれの「台湾人」（『余生』にある紹介による）としている。『余生』中には「私は平埔シラヤ大漢人」とも書いている（133頁）。また小説の冒頭に、自らの兵役経験と、「軍隊に去勢された」その衝撃、国家と軍隊の起源と意味について思考を促されたと書いている（43頁）。

26) この時点で舞鶴は、「私は平埔族だ」と川中島集落の人々に語りかけることはしなかったようである。少なくとも小説には描かれていない。台南県でシラヤ文化協会ができたのが1998年であり、その後運動を活性化させ、2006年には県政府にシラヤ先住民事務委員会が設立され、2010年4月には平埔權益促進会が国連に中華民国政府の民族認定の遅滞を訴え、2010年9月には中央政府の先住民族委員会に先住民族の認定を申請している。『余生』の出版が1999年であることを考えると、舞鶴が明確にシラヤのアイデンティティを公言していたかは微妙な問題である。

ルに描くのではなく、暴力の経験を緩和し、癒されることを念頭に置きつつ記述を実践していく。このような記述の運動こそが脱植民化の重要なスタイルなのであり、それは読む側の読みの運動に、様々な喚起を引き出しつつ運動してくるものである。

ナショナリズムに縛られてきた日本人主体にとって脱植民化は、同化政策の中で暴力を含めた経験をしてきた台湾先住民族を理解することであろう。本稿で取り上げた舞鶴と津島佑子の小説は、そうした台湾先住民族の経験に対して、自らの立ち位置と痛みを伴う経験を見すえ、それに寄り添いつつ、生き残された生と暴力の想像から理解を試みるものである。当事者の立場と経験からの脱植民化の運動は、舞鶴と津島の小説のみならず、強度には若干の差こそあれ、中村勝の『捕囚』においても重要な問題と認識されている。それぞれの作品が発表された「場」は、既存の「小説」や「歴史学」というジャンルやディシプリン（学問制度と分野）ではある。それを本稿では、それぞれのテキストが持つ、ジャンルやディシプリンを乗り越えていく力と、脱植民化の力に注目し、言語化しようとしている。

植民化される以前の台湾先住民、そして植民化される中でも存在した従来の「主体的自然」と「受動的実践」の態度は、天皇制国民国家と資本主義の論理が継続する現代日本において、脱植民化を志向しつつ日本資本主義史と台湾先住民史の連関を描き出す筆者中村自身の態度でもある。それは、小学校の担任に「最低の教育環境」と言われたような、中村が生まれ育った1950年代東京の下町とストリート・レベルの人々の描写、またそれから50年後の21世紀における東京の「ホーム・レス」氏、居酒屋にて20年来時給千円で働く男性らの描写に、通底するものである（「序言」参照）。そのような環境で育ちながらも大学教員を長年務めた筆者の位置は、筆者の言う「階級」との関連においてより精密な記述（分析）が必要とされよう。しかしここで確認されることは、天皇制国民国家と資本制の中での当事者としての中村の立場と経験であり、それはこれまでに見た小説と小説家同様、痛みを伴うものであった。

当事者の立場と経験を、当事者性という言葉でくくろう。これまで取り上げた二人の小説家と一人の歴史家は、通常の意味では台湾先住民族

ではない（舞鶴はシラヤという微妙な問題をはらんでいるが、『余生』においては前景化しない）。以上に挙げたテキストは、台湾先住民族の外部から、それぞれが固有の当事者性から台湾先住民族の被植民の暴力を含む経験を感知し想像し、描き出している²⁷⁾。台湾先住民族をとりまくマジョリティにとっての脱植民化は、自らの立場と経験に寄り添う形で台湾先住民族の経験を想像することと、資本と国家の関係によりなされてきた植民化のメカニズムを追究していくことの、双方を統合する地点にある。

おわりに

脱植民化のスタイルとは、国籍や民族、性別といった変数を異にする個々人が自らの立ち位置と自らの経験から、植民され続けた人々の経験を想像するようなものであろう。この場合の想像とは、明確に要綱化された目標やロジックを持って対象に臨む姿勢とは異なり、問題意識や違和感から人間関係に一步踏み込み、触発されあう関係の中で生じるものである。このことが本稿で取りあげた舞鶴と津島の小説に顕著である。そしてその人間関係は、「フィールドワーク」や旅、あるいは日常において経験されるものであり、記述者の過去と立場がそこでもう一度登場し、編成され直す。それが舞鶴の言う「遡行の旅」である。そこでは帝国日本の天皇制とは異なる形で、新しい親密な関係が作られる。国家を媒介としない関係性が、民族間、ジェンダー間に生まれ、死者との交感とその記憶の分有がそれらの関係を生み出す際に鍵となる。

中村の社会科学的記述の根底には、脱植民的な未来と別の社会への構想が存在する。本稿で詳述は出来なかったが、『捕囚』は植民化の機軸の分析と共に、台湾先住民族の被植民の体験の記述でもある。そして中村も舞鶴と津島に同じく、独自のフィールドワークー「山行」の中で、

27) この点で、土場学（2007）が社会学の立場から、「調査」し記述する者の経験的リアリティと、その理屈と感情を同時に伝える「語り方」の問題を提起していることは、本稿の問題意識に節合されうるものである。

台湾先住民族の生活文化に学び、聞き書きを行なってきた。日本植民主義と中村の言う植民国家資本に生活を大きく規定されてきたその経験は、東京のいわゆる「底辺」の労働者や「ホーム・レス」と結びつくものであった。中村はそのような事態ののひとりの当事者としての自らの経験から、浩瀚な台湾先住民族史を描いている。

本稿は、台湾先住民族とかかわりを持った日本人男性と日本人女性、「平埔シラヤ大漢人」あるいは「台湾人」による歴史書と小説を、植民された経験の想像という点において、つまり脱植民化の運動として節合してきた。資本と国家の結びつきを見すえ、それに大きく規定されてきた台湾先住民族の経験を分有してしまうこと——それは「フィールドワーク」に限らず「読み」においてもなされる——、台湾先住民族とその周囲の人々の脱植民の運動は、そこに既に始まっている。

<引用文献>

- Komatsu, Kazuhiko(1987)、“‘Woman’ as an Image of Fear: A Comparison of ‘Vagina Dentata’ and ‘Female Monster’ Folktales,” *Senri Ethnological Studies*. 21: 321–336
- 石原俊(2007)、『近代日本と小笠原諸島：移動民の島々と帝国』、東京：平凡社
- 伊藤るり他編(2010)、『モダンガールと植民地的近代：東アジアにおける帝国・資本・ジェンダー』、東京：岩波書店
- 岩崎稔(2008)、「記念碑と対抗的記念碑」、『Quadrante：四分儀：地域・文化・位置のための総合雑誌』10: 47–56
- 上野俊樹(1998)、「民属（Volk）と民族（Nation）の区別にもとづく民族理論の形成」、『立命館経済学』47(2, 3, 4): 238–260
- 岡真理(2000)、『記憶／物語』、東京：岩波書店
- 春日直樹(2009)、「フェティシズムとマジカルリアリズム：タウシッグの著作をめぐる覚え書きとして」、田中雅一編『フェティシズム論の系譜と展望』、京都：京都大学出版会、275–293頁
- 金関丈夫(1976[1940])、「Vagina Dentata」『木馬と石牛：民族学の周辺』、東京：角川書店、238–278頁
- 加納実紀代(2002)、『天皇制とジェンダー』、東京：インパクト出版会
- 加藤恵介(1999)、「訳者解説：解釈から分割＝分有(パルタージュ)へ」ジャン＝リュック・ナンシー『声の分割(パルタージュ)』、91–108頁

- 小檜山ルイ(2010)、「『婦人之友』における洋装化運動とモダンガール」伊藤るり他編、175-202頁
- 小山静子(1999)、『家庭の生成と女性の国民化』、東京：勁草書房
- 齋藤純一編(2003)、『親密圏のポリティクス』、京都：ナカニシヤ
- 坂元さおり(2009)、「『父の記憶』を引き継ぐ娘たち：津島佑子『あまりに野蛮な』を読む」、『社会文学』30: 115-122
- 伊藤、バーバラ・H(2010)、「植民地的近代と消費者の欲望」伊藤るり他編、203-231頁
- 周婉窈(2009)、「植民地主義の後遺症：台湾を中心に」、『立命館言語文化』20(3):133-143
- _____(2010)、「試論戦後台湾關於霧社事件的解釈」（戦後台湾の霧社事件に関する解釈試論）、『台湾風物』60(3): 11-57（中国語）
- 津島佑子(1980)、『山を走る女』、東京：講談社
- _____(1988)、『夢の記録』、東京：文藝春秋
- _____(2008)、『あまりに野蛮な』（上・下）、東京：講談社
- _____(2009)、「『野蛮』の意味」『本』34(1): 7-9、（講談社）
- 土場学(2007)、「テーマ別研究動向（当事者性）」、『社会学評論』58(2): 221-230
- 富山一郎編(2006)、『歴史の描き方③ 記憶が語りはじめる』、東京：東京大学出版会
- 中村平(2008)、「分有される植民暴力の記憶：日本人ジャーナリストによる台湾先住民族の民族誌的記述」、『日本文化学報』39: 249-273（韓国日本文化学会）
- _____(2009)、「台湾先住民族タイヤルをとりまく重層的脱植民化の課題：日本と中華民国の植民統治責任と暴力の『記憶の分有』」、『日本学』29: 151-191（東国大学日本学研究所）
- 中村勝・洪金珠著、綱仔絲葉渥口述(1997)、『山深情遥：泰雅族女性綱仔絲葉渥の一生』（山深く情遥かに：タイヤル女性チュワス・ラワの一生）、台北：時報出版（中国語）
- 中村勝(2003)、『台湾高地先住民の歴史人類学：清朝・日帝初期統治政策の研究』、東京：緑蔭書房
- _____(2006)、『「愛国」と「他者」：台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ』、東京：ヨベル
- _____(2009)、『捕囚：植民国家台湾における主体的自然と社会的権力に関する歴史人類学』、東京：ハーベスト社
- ナンシー、ジャン＝リュック(1999)、『声の分割(パルターージュ)』加藤恵介訳、京都：松籟社（Jean-Luc Nancy. 1982. *Le Partage des Voix*. Paris: Galilée）
- _____(2001)、『無為の共同体：哲学を問い直す分有の思考』西谷修・安原伸一朗訳、東京：以文社（1986. *La Communauté Désœuvrée*. Paris: Christian Bourgois、翻訳は1999年版）
- 西川祐子(2000)、『近代国家と家族モデル』、東京：吉川弘文館
- 西谷修(2002)、「ナンシー：『共に在る』とはどういうことか」、『理戦』71: 120-133
- 深尾葉子(2009)、「魂の脱植民地化とは何か：呪縛・憑依・蓋」、『東洋文化』（東京大学）89: 9-40
- 舞鶴(1999)、『餘生』、台北：麥田（中国語）

- 丸川哲史(2000)、『台湾、ポストコロニアルの身体』、東京：青土社
- ミース、M・C・V・ヴェールホフ、V・B・トムゼン(1995)、『世界システムと女性』古田睦美・善本裕子訳、東京：藤原書店 (Maria Mies, Veronika Benholdt-Thomsen and Claudia von Werlhof, 1988, *Women: The Last Colony*, Zed Books)
- 三浦雅士(1988)、「津島佑子・人と作品」『昭和文学全集』29: 1054-1057、小学館 (ソウル：계명문화사、1996年) (津島の1987年までの年譜が付されている)
- 宮地尚子(2005)、「男制の暴力とオルタナティブな親密性」、『情況』(第三期) 6(5): 162-171
- 牟田和恵(2006)、『ジェンダー家族を超えて：近現代の生/性の政治とフェミニズム』、東京：新曜社
- (2010)、「新しい女・モガ・良妻賢母」伊藤るり他編、151-172頁
- 村井康男・村田陽一(1954)、「解説」F・エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』、東京：大月書店、245-260頁
- 日本順益台湾原住民研究会編(2001)、『台湾原住民研究概覧：日本からの視点』、東京：風響社
- 山室信一(2005)、「東アジアにおける日本近代法」、早稲田大学比較法研究所編『日本法の国際的文脈：西欧・アジアとの連鎖』同研究所、109-145頁
- 山本亮介(2005)、「『火の山：山猿記』：〈体験していない者〉による〈記録〉」川村湊編『現代女性作家読本3 津島佑子』、東京：鼎書房、128-131頁
- 与那覇恵子編(2006)、「年譜／津島佑子」津島佑子『山を走る女』、東京：講談社、386-399頁
- 利格拉楽(リカラッ)・阿[女鳥](アウー)(1998)、『穆莉淡Mulidan：部落手札』(ムリダン：集落親書)、台北：女書文化事業 (中国語)
- ルクセンブルク、ローザ(2001)、『資本蓄積論 (第三編)』新訳増補、太田哲男訳、東京：同時代社 (Rosa Luxemburg, 1913. *Die Akkumulation des Kapitals*)

後記：本稿の作成に当たりましては、陳静文氏ならびに周婉窈教授に、小説『余生』の重要性和面白さをかねてからご教示いただいていた。ここに記して感謝します。なお本稿は、韓国日本学聯合会第8回大会 (南ソウル大、2010年7月3日) での発表、ならびに漢陽大日本言語文化学科のBrain Korea21事業の一貫として行われた、筑波大学での「次世代の東アジア：学生知的交流国際会議」(2010年1月10日)、ポートランド州立大学でのThe Association for Asian Studies on the Pacific Coast年次大会 (2010年6月18日) での発表を基にしています。それぞれの場でコメントを下さった方々、また本誌の査読者に感謝します。

논문투고일 : 2010.12.8

논문심사일 : 2010.12.9

심사확정일 : 2010.12.21

인적사항

성명 : (한글) 나카무라 타이라 (한자) 中村 平 (영문) Nakamura Taira

소속 : 한양대학교 국제문화대학 일본언어문화학과 조교수

논문영문제목 : A Power to imagine the colonized experiences: Reading
"Yusheng" (*Remains of Life*) and "Amarini Yabanna" (*Much Too Brutal*) in relation to the mechanism of the Colonial State
Capital which surrounds Taiwanese Indigenous Peoples

주소 : 경기도 안산시 상록구 사3동 1271번지 한양대학교 국제문화대학 일본
언어문화학과 411호

e-mail : husv83@gmail.com